

平成27-令和2年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業  
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）

千葉大学・東邦大学・量子科学技術研究開発機構

# 事業成果 報告書



## 事業成果報告書

### 目次

ご挨拶 成果報告書の発行にあたって	千葉大学	3
	東邦大学	4
	量子科学技術研究開発機構	5
事業概要	具体的な取り組み	7
	事業運営体制	7
	会議開催記録	8
目標達成状況		10
6年間の取り組みの成果 《3機関によるオンラインディスカッション》	研究機関におけるダイバーシティ推進の連携を どのように発展させていくか	12
ダイバーシティ環境推進	ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム	16
	共同シンポジウム	16
	コンソーシアム連絡会	18
	ライフイベント支援	20
	研究支援要員配置制度	22
研究力向上	研究スキルアップセミナー	26
	研究インターンシップ	27
	英文校閲経費支援制度	28
	外国人招へい支援制度	28
	共同研究強化支援制度	29
キャリア・アップ支援	千葉大学	34
	東邦大学	35
	量子科学技術研究開発機構	35
各機関の取り組み	千葉大学	36
	東邦大学	38
	量子科学技術研究開発機構	40
活動の記録		42

## ご挨拶 成果報告書の発行にあたって

千葉大学



実施責任者  
理事  
山田 賢

総括責任者  
学長  
徳久 剛史

実施責任者  
副理事（ダイバーシティ推進）  
森 恵美

千葉大学では、女性研究者のもつ素晴らしい能力が十分に発揮されるような環境の実現に向けて、ダイバーシティ推進部門が中心となってさまざまな取り組みを行ってきています。平成27年からは本事業の支援を受けて、東邦大学や量子科学技術研究開発機構と連携して、ダイバーシティ研究環境の整備とともに、女性研究者の研究力向上とキャリア・アップ支援を実施してきました。その結果、この6年間で本学の女性研究者比率が19.7%から21.7%に、上位職者比率が16.3%から19.7%に上昇しています。

さらに、ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアムを組織して、3機関のこれまでの取り組みを近隣の12研究機関へ波及させるとともに、共同研究の支援・促進のための取り組みを実施してきました。その結果、女性研究者が代表となる共同研究数が本学で13件、3機関合計で53件に増加しています。このような活動が全国に波及することにより、日本の女性研究者の拡大につながることを期待しています。





実施責任者  
ダイバーシティ推進センター長  
片桐 由起子

総括責任者  
学長  
高松 研

本事業は、女性研究者の研究力向上支援を目的として、国立大学・国立研究機関と私立大学が連携し、お互いの組織文化の相違を乗り越え、自らにはない考え方やシステムを共有できる機会となりました。これからの東邦大学のダイバーシティのさらなる発展の礎になったと実感しています。そして、本事業は個々の研究者の連携の契機になり、複数の研究機関・教育機関・公共機関・企業等とのコンソーシアム形成にもつながりました。

本学では、平成27年から令和2年の6年間の連携期間において、女性研究者の上位職割合が16%から22.5%へ上昇し、事業目標を達成することができました。これは、上位職に学外から完成された女性研究者を採用することに加え、学内で上位職に相応しい人材を育成するという取り組みの成果であると評価しています。学内における人材育成の文化が根つき、本事業が一区切りを迎えた今後も継続するものと確信します。連携により成熟した本学の取り組みが継続し発展するべく、努力を続けていく所存です。今後ともよろしくご願ひ申し上げます。



実施責任者  
ダイバーシティ推進室長  
柿沼 志津子

総括責任者  
理事長  
平野 俊夫

実施責任者  
理事  
木村 直人

量子科学技術研究開発機構(量研)は、本取り組みを始めた6年前の時点では男女共同参画の重要性は理解しつつも、その実現に向けた組織的な取り組みは大変未熟な状況にありました。この事業に採択されたことで新たにダイバーシティ推進室を設置し、経験豊富な千葉大学と東邦大学と連携して多様な取り組みを進めることで、組織の中にダイバーシティ推進の意識が生まれてきました。

量研では、特に研究力向上に向けた取り組みを推進しました。新たに制定したさまざまな支援制度は、女性研究者にサポートされている安心感と意識変化をもたらし、それがよい結果となって、英文論文数の増加や研究費の獲得、上位職への昇進につながりました。特に女性が研究代表者として取り組む共同研究強化支援は、研究力向上のみならず、研究代表者として共同研究先との連携、計画・予算進捗管理を自分で行うことで、それぞれの研究者の成長につながりました。また、支援要員配置制度や企業主導型保育園を利用可能にしたことは、ライフイベントにより研究時間に制限を受ける研究者の研究継続に役立っているようです。

今回の事業により、ダイバーシティ推進のための取り組みを、ゼロの状態から一研究所での取り組みに、さらには組織全体の取り組みへと拡大できたことは、大いに意義があります。事業終了後も継続して千葉大学、東邦大学と連携を続けつつ、さらなる発展ができるようにと考えております。

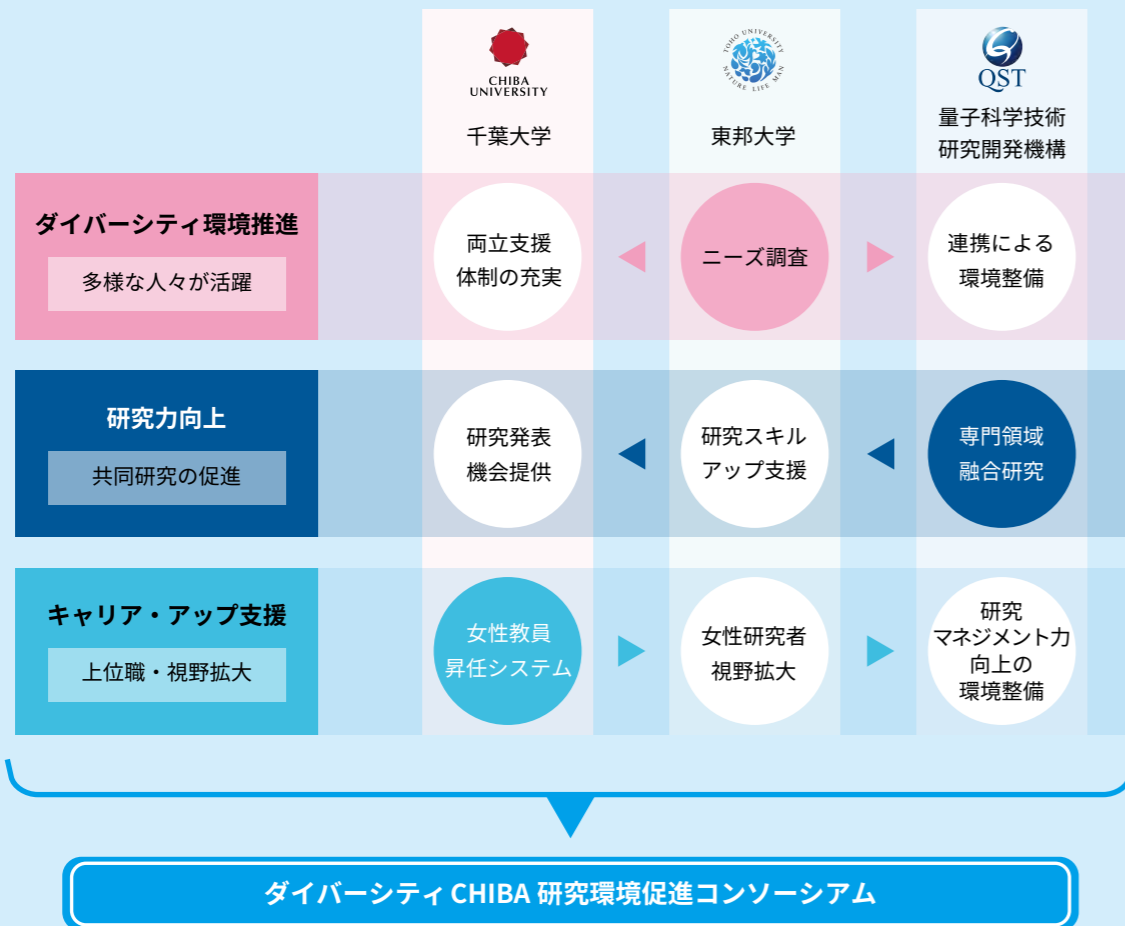


# 事業概要

千葉大学、東邦大学、放射線医学総合研究所（選定時。平成28年度より量子科学技術研究開発機構）の3機関は、平成27年度に6年間の事業として、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」に選定されました。本事業は、機関や地域の特色を踏まえた女性研究者の活躍推進に向けた組織全体としての目標・行動計画を設定、公表する機関を対象とし、女性研究者のライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や研究力向上のための取り組み及び上位職への積極登用に向けた取り組みを支援する事業です。

本事業では、千葉大学が代表機関となり、東邦大学、量子科学技術研究開発機構が共同実施機関として連携し、「ダイバーシティ環境推進」、「研究力向上」、「キャリア・アップ支援」の3つの柱で、各機関の強みを活かした取り組みを実施しました。平成27年度には3機関ともに、千葉県内にキャンパスをもつ研究機関として、ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアムを設立し、本事業で取り組んだ成果の普及にも努めています。

## 連携機関の実績や強みを相互に波及させる仕組みづくり



# 具体的な取り組み

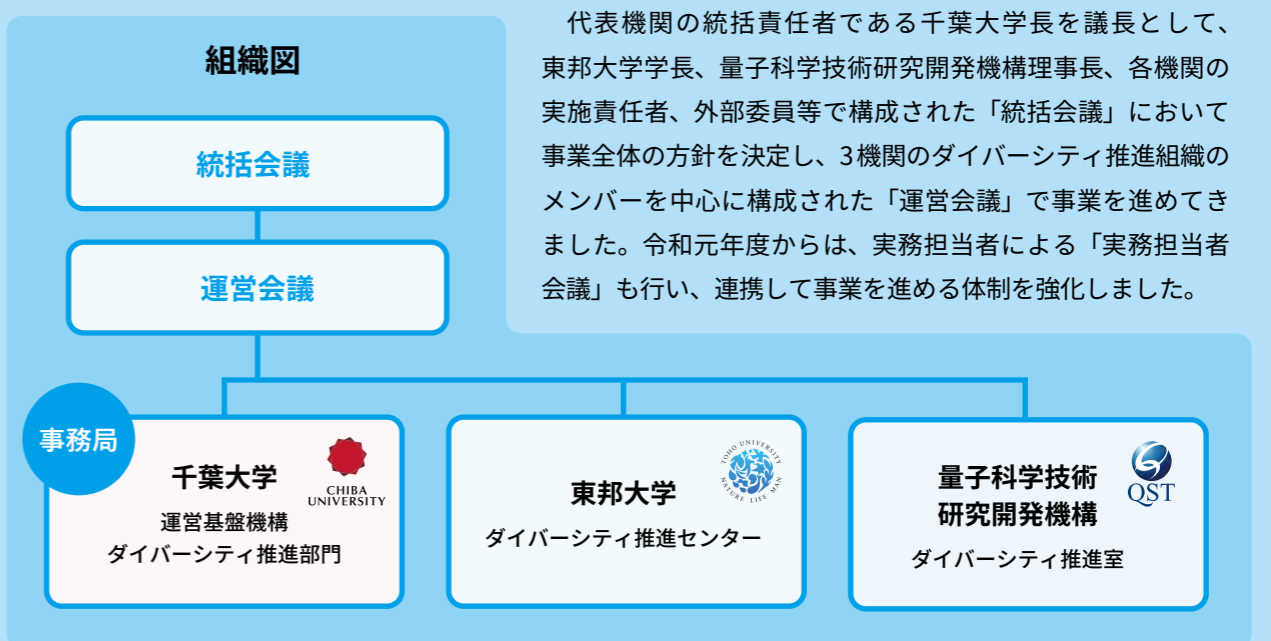
本事業では、各機関の強みを活かし、多様な立場や経験をもつ人材が広く活躍できるダイバーシティ研究環境を実現するため、「ダイバーシティ環境推進」、「研究力向上」、「キャリア・アップ支援」の3つの柱を計画し、取り組みを進めました。

「ダイバーシティ環境推進」では、ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアムを設立し、コンソーシアム連絡会や共同シンポジウムを開催しました。また、育児や介護負担のある研究者が、研究活動を継続できる体制をつくるため、ニーズ調査の実施や、研究支援要員配置制度を実施しました。「研究力向上」では、研究スキルアップセミナー、研究インターンシップ、英文校閲経費支援制度、外国人招へい支援制度、共同研究強化支援制度を新設し、3機関で協力体制を取りながら、研究者がスキルアップできる仕組みづくりを進めました。「キャリア・アップ支援」では、優秀な女性研究者の上位職へのキャリアパスを保証する制度づくりや、セミナー等を行いました。

## 取り組みの3つの柱



# 事業運営体制



# 会議開催記録

事業概要

統括会議	平成27年度 (2015)	●第1回 平成27年 1月 11日 ●第2回 平成28年 3月 11日
	平成28年度 (2016)	●第1回 平成28年 6月 27日 ●第2回 平成28年 12月 3日 ●第3回 平成29年 3月 27日
	平成29年度 (2017)	●第1回 平成29年 6月 16日 ●第2回 平成29年 12月 20日 ●第3回 平成30年 3月 28日
	平成30年度 (2018)	●第1回 平成30年 6月 18日 ●第2回 平成31年 3月 7日
	令和元年度 (2019)	●第1回 令和元年 7月 8日 ●第2回 令和2年 3月 16日
	令和2年度 (2020)	●第1回 令和2年 6月 29日 ●第2回 令和3年 3月 19日



運営会議	平成27年度 (2015)	●第1回 平成27年 8月 5日 ●第2回 平成27年 9月 3日 ●第3回 平成27年 10月 1日 ●第4回 平成27年 11月 5日 ●第5回 平成27年 12月 3日 ●第6回 平成28年 1月 7日 ●第7回 平成28年 2月 4日 ●第8回 平成28年 3月 3日
	平成28年度 (2016)	●第1回 平成28年 4月 7日 ●第2回 平成28年 5月 12日 ●第3回 平成28年 6月 2日 ●第4回 平成28年 7月 7日 ●第5回 平成28年 8月 4日 ●第6回 平成28年 9月 1日 ●第7回 平成28年 10月 6日 ●第8回 平成28年 11月 10日 ●第9回 平成28年 12月 1日 ●第10回 平成29年 1月 12日 ●第11回 平成29年 2月 2日 ●第12回 平成29年 3月 2日
	平成29年度 (2017)	●第1回 平成29年 4月 13日 ●第2回 平成29年 5月 18日 ●第3回 平成29年 6月 8日 ●第4回 平成29年 7月 6日 ●第5回 平成29年 8月 3日 ●第6回 平成29年 9月 4日 ●第7回 平成29年 10月 12日 ●第8回 平成29年 11月 9日 ●第9回 平成29年 12月 7日 ●第10回 平成30年 11月 18日 ●第11回 平成30年 3月 1日
	平成30年度 (2018)	●第1回 平成30年 4月 12日 ●第2回 平成30年 6月 7日 ●第3回 平成30年 9月 7日 ●第4回 平成30年 11月 8日 ●第5回 平成31年 1月 10日 ●第6回 平成31年 2月 28日
	令和元年度 (2019)	●第1回 平成31年 4月 4日 ●第2回 令和元年 6月 6日 ●第3回 令和元年 9月 5日 ●第4回 令和元年 11月 14日 ●第5回 令和2年 1月 9日 ●第6回 令和2年 2月 27日
	令和2年度 (2020)	●第1回 令和2年 6月 4日 ●第2回 令和2年 9月 10日 ●第3回 令和2年 11月 12日 ●第4回 令和3年 1月 14日 ●第5回 令和3年 2月 18日

実務担当者会議	令和元年度 (2019)	●第1回 令和元年 5月 9日 ●第2回 令和元年 7月 17日 ●第3回 令和元年 10月 8日 ●第4回 令和2年 2月 21日
	令和2年度 (2020)	●第1回 令和2年 7月 7日 ●第2回 令和2年 7月 31日 ●第3回 令和2年 9月 14日 ●第4回 令和2年 11月 9日 ●第5回 令和2年 12月 16日

## 実務担当者会議 構成委員

小玉 小百合	千葉大学 ダイバーシティ推進部門 特任研究員	石塚 慶子	千葉大学 ダイバーシティ推進部門
広田 幸子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター 特任准教授	小向 里永子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター
山下 槇子	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 室員	江川 恵里加	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 室員

## 統括会議構成委員

構成委員	所属・役職	就任期間
徳久 剛史	千葉大学長 ◆代表機関 総括責任者	H27-R2
高松 研	東邦大学 学長 ◆共同実施機関 総括責任者	H30-R2
山崎 純一	東邦大学 学長 ◆共同実施機関 総括責任者	H27-H30
平野 俊夫	量子科学技術研究開発機構 理事長 ◆共同実施機関 総括責任者	H28-R2
米倉 義晴	放射線医学総合研究所 理事長 ◆共同実施機関 総括責任者	H27
土井 美和子	情報通信研究機構 監事/奈良先端科学技術大学院大学 理事/東北大学 理事 ◆外部委員	H27-R2
轟 洋子	千葉県男女共同参画課 課長 ◆外部委員	R2
板倉 由妃子	千葉県男女共同参画課 課長 ◆外部委員	R1
福田 有理	千葉県男女共同参画課 課長 ◆外部委員	H29-H30
渡辺 絹代	千葉県男女共同参画課 課長 ◆外部委員	H27-H28
山田 賢	千葉大学 理事 ◆代表機関 実施責任者	H29-R2
安村 勉	千葉大学 理事 ◆代表機関 実施責任者	H27-H28
森 恵美	千葉大学 副理事 ダイバーシティ推進部門長 ◆代表機関 実施責任者	H27-R2
片桐 由起子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター長 ◆共同実施機関 実施責任者	H27-R2
木村 直人	量子科学技術研究開発機構 理事 ◆共同実施機関 実施責任者	R2
板倉 康洋	量子科学技術研究開発機構 理事 ◆共同実施機関 実施責任者	H30-R1
島田 義也	量子科学技術研究開発機構 理事 ◆共同実施機関 実施責任者	H28-H30
黒木 慎一	放射線医学総合研究所 理事 ◆共同実施機関 実施責任者	H27
柿沼 志津子	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室長 ◆共同実施機関 実施責任者	H27-R2

## 運営会議構成委員

山田 賢	千葉大学 理事	H29-R2
安村 勉	千葉大学 理事	H27-H28
森 恵美	千葉大学 副理事 ダイバーシティ推進部門長	H27-R2
小玉 小百合	千葉大学 ダイバーシティ推進部門 特任研究員	H27-R2
根本 知美	千葉大学 企画総務部人事労務課 副課長	R2
堀越 真史	千葉大学 企画総務部職員課 副課長	H29-R1
宮近 一豊	千葉大学 企画総務部人事課 係長	H27-H28
杉木 清彦	千葉大学 企画総務部職員課 副課長	H27-H28
川名 正信	千葉大学 企画総務部職員課 副課長	H27
片桐 由起子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター長	H27-R2
広田 幸子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター 特任准教授	H27-R2
渡邊 由香	東邦大学 学事統括部 研究支援課 課長	H30-R1
小向 里永子	東邦大学 ダイバーシティ推進センター	H29-R2
中野 弘一	東邦大学 教育・研究支援センター長	H27-H30
神前 裕子	東邦大学 教育・研究支援センター 非常勤講師	H27
浜野 ゆうり	東邦大学 ダイバーシティ推進センター 非常勤講師	H29-H30
平野 亨	東邦大学 教育・研究支援センター 課長	H27-H28
内田 憲之	東邦大学 教育・研究支援センター 係長	H29
柿沼 志津子	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室長	H27-R2
上野 彰	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 次長	H27、R2
笠井 利彦	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 主幹	H28-R2
山下 槇子	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 室員	H27-R2
江川 恵里加	量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 室員	H28-R2

事業概要

# 目標達成状況

本事業では、具体的な6つの事業目標を設定し、3機関でその達成に向けて連携して取り組みを行いました。

## ダイバーシティ環境推進

目標 1	実績			
女性研究者在籍比率は、3年目(平成29年度)終了後には平成26年度実績に比べて上昇し、6年目(令和2年度)終了時には、各機関の目標を達成する。		実施前(H26)	3年目(H29)	6年目(R2)
	3機関全体	24.7%	26.2%	26.8%
	千葉大学	19.7%	20.9%	21.6%
	東邦大学	28.6%	30.1%	31.9%
	量子科学技術研究開発機構	23.9%	25.2%	24.1%

**成果** 3機関全体の女性研究者在籍比率は、実施前に比べ、3年目終了時には1.5%、6年目終了時には、2.1%増加しました。

目標 2	実績	
ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアムに参画する研究機関の数が増加し、6年目(令和2年度)終了時には、その数を倍増させる。	設立時(H26)	6年目(R2)
	3機関	15機関

**成果** 設立時に3機関だった参画機関は、6年目には15機関に増加しました。(詳細は p.19参照)

## 研究力向上

目標 3	実績		
女性研究者が研究代表者となる共同研究数が増加する		実施前(H26)	6年間合計
	3機関全体	0件	53件
	千葉大学	—	13件
	東邦大学	—	19件
	量子科学技術研究開発機構	—	21件

※1 共同研究強化支援制度(3機関の助成研究者が代表となって実施する共同研究への研究費支援)による共同研究数

**成果** 各機関の女性研究者が研究代表者となった共同研究は、6年間で53件実施されました。(詳細は pp.29-32参照)

目標 4	実績			
女性研究者の文部科学省科学研究費助成事業への申請が増え、採択率が上昇する		実施前(H26)	3年目(H29)	6年目(R2)
	千葉大学	23.1%	23.0%	23.4%
	東邦大学	23.2%	26.3%	27.0%
	量子科学技術研究開発機構	27.5%	55.6%	40.0%

※2 文部科学省研究振興局発表データ(新規+継続)

**成果** 各機関の女性研究者が研究代表者となる科学研究費助成事業の採択率は、実施前に比べ、6年目には各機関ともに増加しました。

目標 5	実績	
地域のダイバーシティ研究環境を推進し、若手女性研究者の研究インターンシップを活性化させる。	設立時(H26)	6年間合計
	—	17名

**成果** 量子科学技術研究開発機構主催で実施した放医研インターンシップ、短期インターンシップには、6年間で合計17名の研究者が参加しました。(詳細は p. 27参照)

## キャリア・アップ支援

目標 6	実績			
上位職への女性研究者比率(教授相当、准教授・講師相当)は、3年目(平成29年度)終了後に、平成26年度実績に比べて上昇し、6年目(令和2年度)終了時には、各機関の目標を達成する。		実施前(H26)	3年目(H29)	6年目(R2)
	3機関全体	15.9%	17.9%	20.4%
	千葉大学	16.3%	18.1%	19.7%
	東邦大学	15.5%	18.3%	22.5%
	量子科学技術研究開発機構	15.3%	15.6%	17.0%

**成果** 3機関全体の女性研究者上位職比率は、実施前に比べ、3年目終了時には2.0%、6年目終了時には、4.5%増加しました。





# 6年間の取り組みの成果

《3機関によるオンラインディスカッション》

## 研究機関における ダイバーシティ推進の連携を どのように発展させていくか

コロナ禍の8月、  
オンラインでの鼎談<sup>ていだん</sup>でした。  
6年間の取り組みを振り返ります。  
収録：令和2年8月21日（金）



● 千葉大学  
ダイバーシティ推進部門 部門長  
森 恵美



● 東邦大学  
ダイバーシティ推進センター  
センター長  
片桐 由起子



● 量子科学技術研究開発機構  
ダイバーシティ推進室 室長  
柿沼 志津子

### ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (連携型) 事業の成果

森 ● まず、この6年間のダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業で促進された取り組みについて、千葉大学からお話したいと思います。千葉大学では代表機関として、さまざまなプログラムを実施してきました。中でも特に推進されたのは、「女性教員昇任システム」の導入と実施です。この期間、9名の女性が上位職に昇任し、うち3名は教授に就任しました。

片桐 ● 東邦大学では女性研究者に英文校閲支援を行い、英語論文の業績が増えました。そこから科研費の獲得、あるいは論文執筆の業績につながり、助教から講師、講師から准教授へと昇進もあり、上位職率が向上しました。「学内の女

性研究者を育てる」ことに、大きく貢献できたと思います。

森 ● 今の片桐先生のお話にあったように、女性研究者が上位職への昇進につながるようになったことが、このプログラムで非常に重要な点だと思います。千葉大学は先に述べたように新たなシステムをつくりましたが、東邦大学は今までの学内の仕組みの中で、業績をある程度獲得した女性研究者をうまくボトムアップしていくシステムが働いています。その点にとっても勇気づけられました。

柿沼 ● 量子科学技術研究開発機構(以下、量研)では、ダイバーシティについてはこの事業の開始当初ゼロベースから始まりましたが、千葉大学、東邦大学とともにこの事業を行うことで、研究の幅が広がりました。その結果、科研費の応募が促され、採択率が上がっています。昇進については、大学とはシステムが異なりますが、任期制職員から正規雇用職員へ、主任研究者から課長級のグループリーダー、さらには部長級へと、この5年間で昇進が着実に進みました。量研だけではなく3機関で取り組んだことが、私たちにとっては大きな助けになりました。

### 共同研究の推進とその成果



森 ● 共同研究の推進については、今まで水面下で行われていた共同研究が見える化されたことが、非常に特徴的でした。このプログラムがなければ、そうした研究者のネットワークを知ることでもできなかったでしょう。

柿沼 ● 量研では千葉大学とのももとの共同研究協力関係がさらに推進され、今年度は共同で科研費に応募して採択された先生もいらっしゃいます。また東邦大学とは新たに共同研究を始め、ともに論文作成、あるいはレビューを書くというように新しい形の研究が進み、それが継続していることが非常によかったです。

森 ● 3機関の連携により、共同研究が推進できたことが大きな成果だと思います。それにより女性研究者がそれぞれ業績を蓄積し、3機関とも女性上位職の増加につながりました。

柿沼 ● 今までは共同研究というと、男性の研究者あるいは上司がリードしていく傾向にありましたが、それをあえて女性が引っ張っていくように設定したことが、非常に有効に機能して女性研究者の力になっていったのだと思います。

片桐 ● 私もそう思います。女性研究者の顔がしっかりと見える契機となり、ありがたい連携だったと実感しています。

### 連携の経緯と事業促進の秘訣

森 ● この連携は、千葉大学が東邦大学とつながりがあり、また量研とはもともと関係があったというように、トップが以前から研究者ネットワークを築いていたことが大きな強みだったと思います。平成27年度、千葉大学から、東邦大学、量研にそれぞれお声がけしたわけですが、当時の印象と、現在のゴールの時点で思うことをお聞かせください。

片桐 ● 最初、東邦大学には習志野キャンパスがあるので、それでお声がけいただいたのかなということが、真っ先に頭に浮かびました。この6年間で、ロケーションのことだけではなく、人とのつながり、研究としてのつながりという形で、もともとあったつながりが、さらにしっかりと太くなったと感じています。

柿沼 ● 千葉大学とは距離が近く、特に医学系の連携が強かったことから、このたびの連携に至ったのだと思いますが、私自身、もともと千葉大学長から研究を学ばせていただいていたこともあり、非常に身近なこととして受け止めました。こんなに大変な仕事になるとは思いませんでしたが(笑)。

森 ● 成果を得られた理由は、3機関それぞれの持ち味や強みを活かすことができたからだと思います。私は東邦大学の子育て支援施策—例えば、子育て支援、介護支援の講習会などを間髪入れずに土曜日にも行っていただいたことがとてもよかったですし、量研の研究推進力—臨床で困っていることを研究に乗せていく力などには学ぶべきものがあると感じました。

片桐 ● おっしゃる通りで3機関の組織の背景が異なっていたことが、よい連携パートナーとなりうるポイントだったと思います。私どもは私立大学ですから、私学としての取り組みをしてきましたが、国立大学そして総合大学としての千葉大学と、研究機関として大学とはまた違った組織である量研ならではの取り組みを間近に見せていただくよい機会になりました。

森 ● 柿沼先生はいかがですか。私は量研で実施していた研究者を対象としたインターンシップ制度<sup>※1</sup>が非常に刺激的でした。

〔※1 p.27 参照〕

柿沼 ● 量研は千葉大学・東邦大学と比較すると規模が小さく、保育所の設置など大学で取り組んでいることをそのまま導入することは難しく、どのように取り入れられるかが課題でした。逆に研究面では、研究者は時間を十分にもっており、千葉大学、東邦大学の先生にいろいろな研究の場を提供するなど、チャンスをつくることができました。こちらにインターンシップに來られたことを機に、そのまま共同研究につながっているケースもあり、こういう場がなければスタートできなかったことを考えると、非常によい機会創出ができたと思います。

森 ● 私もそう思います。特に共同研究の推進の仕方、どのように共同研究者を探すかといった研修会も開いていただきましたし、研究を一般の人にどうプレゼンテーションするかという視点も、非常に刺激的で勉強になりました。また、私たち3人とも医療系というバックグラウンドが共通しているのでとても話がしやすく、このことも事業がうまくいった一因だと思います。この事業の間に片桐先生が教授になられたことも、非常に印象的でした。





**柿沼** ● おっしゃる通り、バックグラウンドが非常に近いため通じるものがあり、気軽にお二人にいろいろなことをご相談して進めることができました。

**森** ● 事務担当者同士の連携もスムーズで、支えてくださった方々とも非常によいパートナーを組めました。これも6年間の成果だと思います。

**片桐** ● 本当に、代表者だけでなく、それを支えてくださったスタッフの力もありますし、顔を合わせたり連絡を取ったりする機会がとて多く、そういったことの積み上げで非常に強い連携ができたと思感しています。

**柿沼** ● 私もその積み重ねは、これから事業を継続していくために大変重要だったと思っています。

### 今後の事業継続について

**森** ● 事業自体は6年間で終了ですが、千葉大学では発展的にさらに続け、特にコンソーシアムは拡大していかなくてはならないと考えています。今後の取り組みや継続について、何を大事にしていくべきか、お聞かせください。

**片桐** ● 継続していく中ではメンバーが変わっていくと思いますが、担当者あるいは代表者が交代しても、ずっと連携していくことが非常に大切だと思います。次に担ってくれる人たちがどのくらい育っているのか、どのくらい育てることができるのかに一番関心をもっています。

**柿沼** ● やはり次につなげていくことが大切で、自分の仕事を引き継いでくれる方を選ばなくてはと考えています。3機関の連携は、今後たとえ頻度が少なくなるとしても、続けていくべきで、その継続には努力が必要ですが、あまり気負わずに続けていくことが大事だと思っています。

**森** ● 私も次の世代を育てることが大きな課題だと常に考えています。次の世代や後継者を育てる上でのよいアイデアがありましたらお教えてください。

**片桐** ● 東邦大学ではダイバーシティ推進センターのさまざまな活動に、イベント講演や原稿執筆などの形で協力して下さる方々がいます。このような方々は、こうした事業活動に関心をもってくださっていると考え、ダイバーシティ推進セ

ンターの推進委員に任命し、仲間になっていただいています。現在、5学部で18人の推進委員がおり、その中からさらに深くこの活動に尽力していただける方を後継者として、リーダーシップをとっていただけたらと期待してるところです。

**森** ● 推進委員になった場合、インセンティブはあるのでしょうか。

**片桐** ● はい。任命状を出しております。また、名刺に「ダイバーシティ推進委員」という肩書きを、当センターの経費で入れており、名刺によってそうした活動にも携わっていることをアピールしていただけます。

**森** ● 勉強になります。ありがとうございます。

**柿沼** ● 私どもは、初期の頃に研究の助成を受けてポジションも上がってきた研究者の方に、今度は逆に研究の審査に入ってもらい、「今度はあなたたちが、どういう人にお金をつけるべきかを審査する番ですよ」と、お願いしています。



### コロナ禍の事業継続の工夫

**森** ● このコロナ禍で学んだのは、オンラインでいつでもミーティングができるということです。これを活用し、多忙な女性研究者同士がつながれる機会がもてるのではないかと思います。形式的ではなくカジュアルでフラットに参加できるオンラインの場所をつくってはどうかと考えていますが、いかがでしょうか。

**片桐** ● 私もこの会議を欠席させていただいたことがあります。背景の一つは、移動の時間を確保するのが困難だったということです。しかしこうして Web で顔を合わせてできれば、移動時間を考えなくて済み、負担が非常に軽くなりました。距離やさまざまな環境を乗り越えられますし、お子さんがいる方が自宅からアプローチすることもできます。さまざまな裾野を広げられ、こういう状況下で得られたよいアクションだと実感しています。

**柿沼** ● 量研においても今回のコロナ禍で在宅勤務が推進されました。この恩恵を受けられるのが、自由に使える時間の少ない女性研究者です。このダイバーシティの会議自体、6年前から東邦大学の先生は距離的に離れているため Web で参加されており、むしろ進んでいたのではないかと

思います。やはり移動に時間を使わないので、従来なら一つしか出られなかったところ複数の会議に参加することも容易になりました。メールや書類ベースで何度やり取りしても通じないことが、Web で顔を合わせながら話し合うと、しっかり意思疎通ができるのも、とても大切なことと思っています。

**森** ● 今後、運営会議を続けていく上ではリモートをもっと積極的に取り入れていくことも必要だと思っています。すでに顔の見える関係づくりができていますので、Web 会議のほうが時間の節約になります。後は女性研究者への支援を、オンラインでどう情報提供するかということです。私自身は、育児相談などは、昼の時間のチャットルームをつくってはどうかと考えています。昼であればランチを食べながら気軽に参加できますし、個人的な相談であれば、直接それぞれのダイバーシティ支援室に行っていただくのもよいと思います。

**柿沼** ● 量研では、ランチョンセミナーをやりたいと以前から提案していながら、実現できておらず宿題になっています。でも、こうした状態になったので、フリーの時間を活用し、あるテーマについて講師に短い講義をしていただくといったこともできそうです。これも量研だけでなく、3機関をつなげることもできるので、そうした形を考えていくのはよいと思います。

**片桐** ● それぞれの組織でセミナーを企画・実施すると、予算を始め、企画や準備にエネルギーがかかります。今までもお互いに動画配信という形で共有してきましたが、そうすることで費用の削減にもなりますし、エネルギーを別の部分に振り分けることにもつながれると思いました。

### コンソーシアムへの事業波及

**森** ● 今後はやはりダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム<sup>※2</sup>のほうに、そうした波及効果をしていきたいと思うのですがいかがでしょうか。

(※2 pp.16~19 参照)

**片桐** ● Web 配信によって視聴数も格段に増えるでしょう。それだけ多くの方に発信できるということなので、ぜひ今後とも、そうした形で継続させていただければ強く思います。



**森** ● 量研でも、いつも共同研究のプレゼンなどを配信いただいています。コンソーシアムのほうでも配信するのはいかがでしょうか。

**柿沼** ● Web で参加できる、あるいは配信できるとなると、代表者一人ではなく、各会社や各大学の、より多くの方に視聴してもらえ、コンソーシアムの意味ももっと広がるでしょう。前向きに考えたいですね。

**森** ● ところで、コンソーシアムへの参加機関は拡大はしましたが、今は少し停滞気味です。今後、増やせそうでしょうか。

**柿沼** ● 今はどこもコロナ禍で開催は難しいと思いますが、逆にコロナ禍での状況をテーマにしてはどうでしょうか。コロナ禍はネガティブな社会環境を招いた一方で、働き方を変えました。だからこそ、工夫をしながら進む私たちの取り組みを皆さんに紹介すれば、これまでコンソーシアムに関心のなかった方々にも注目していただけるかもしれません。

**森** ● コロナ禍だからこそその可能性ですね。柿沼先生のお話では、在宅で研究されている方もいるとのことですが、もう少し詳しく教えていただけますか。

**柿沼** ● 特にコンピュータ解析系の研究者は、家にも研究所にいても同じという状況がありました。また、自分でじっくり取り組まねばならない宿題をつくり、在宅時はそれを進めるという方もいます。実験など研究所でなくてはできないこともあります。工夫すれば自宅でもできる仕事もあり、それがまとまれば、また次の段階に進むのだと思います。また、ふだん実験が好きすぎて論文が進まない研究者は、今回在宅することでだいぶ論文が進んだようです。

### 事業終了に向けた課題

**森** ● 最後に、with コロナの時代に、この連携をどうするかという課題をいただいたと思っています。最後のシンポジウムは、「with コロナの時代にダイバーシティをどう推進していくか」という課題でディスカッションを深めたいと思いますが、いかがでしょうか。

**柿沼** ● ぜひその言葉を時代のキーワードとして、むしろ前向きに捉えてディスカッションさせていただく機会になったらと思います。

**片桐** ● こういう機会に改めて頭を切り替えて、いろいろなことを考えて実践していきたいですね。改めて、それを皆さんとディスカッションできたらいいなと思っています。

**森** ● ありがとうございました。



# ダイバーシティ環境推進

※ 所属・役職は実施時点のもので

## ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム

平成27年11月11日、千葉大学、東邦大学、放射線医学総合研究所（現 量子科学技術研究開発機構）は、連携協力に関する協定を締結し、「ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム」を設立しました。コンソーシアムの活動を通じて、千葉県内や近隣地域の企業や研究機関のダイバーシティ研究環境を充実させることで、それらの機関に所属する女性研究者の研究活動の促進や、インターンシップ受け入れの機会の充実、研究者同士が交流できる機会の提供等を行っています。



【写真左から】東邦大学 学長 山崎 純一  
千葉大学長 徳久 剛史  
放射線医学総合研究所 理事長 米倉 義晴

## 共同シンポジウム

コンソーシアムの取り組みを広く周知するため、共同シンポジウムを開催しました。

平成27年11月11日 **キックオフシンポジウム** 千葉大学けやき会館大ホール

- 来賓挨拶** | 文部科学省 科学技術・学術政策局 人材政策課 課長補佐 近藤 潤 氏
- 基調講演** | 『科学技術分野における男女共同参画の推進の現状と課題』  
国立研究開発法人 情報通信研究機構 幹事／日本学術会議 第三部 副部長 科学者委員会 幹事 男女共同参画分科会委員 副委員長 土井 美和子 氏
- 取り組み紹介** | 千葉大学 副理事(男女共同参画) 男女共同参画推進部門長 森 恵美
- 共同研究強化支援研究発表** | 千葉大学、東邦大学、放射線医学総合研究所 研究者



平成28年12月3日 **共同シンポジウム** 東邦大学習志野キャンパス 薬学部C館

- 来賓挨拶** | 文部科学省 科学技術・学術政策局 人材政策課 課長補佐 宮澤 武志 氏
- 取り組み紹介** | 東邦大学 男女共同参画推進センター長 片桐 由起子
- 基調講演** | 『Hokuriku Women Researchers' Networkの構築による企業と連携したダイバーシティ研究環境』  
金沢大学 学長補佐(男女共同参画推進担当) 男女共同参画キャリアデザインラボラトリー長 池本 良子 氏
- 特別講演** | 『共同研究のための研究のこころえ』  
東邦大学 教育・研究支援センター長 産学連携本部長 中野 弘一



平成29年12月20日 **共同シンポジウム**  
量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所 重粒子治療推進棟

- 来賓講演** | 『ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブの実績と今後の動向』  
国立研究開発法人 科学技術振興機構 プログラム主管 山村 康子 氏
- 取り組み紹介** | 量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室長 柿沼 志津子
- パネルディスカッション** | 『3年間のダイバーシティ活動と今後の発展について』  
パネリスト 日本大学 生産工学部 野呂 知加子 氏  
東京農工大学 女性未来育成機構コーディネータ 松本 千穂 氏  
千葉大学 副理事(男女共同参画) 男女共同参画推進部門長 森 恵美  
東邦大学 ダイバーシティ推進センター長 片桐 由起子  
量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室長 柿沼 志津子  
ファシリテーター 量子科学技術研究開発機構 イノベーションセンター長 原田 良信





## コンソーシアム連絡会

女性研究者の活躍促進や組織のダイバーシティ推進に関する情報交換の場として、毎回テーマを設定し、ゲストによるミニセミナーと意見交換を実施しています。

### 第1回

平成29年6月16日

『組織における女性活躍促進・ダイバーシティ推進をどう進めるか』

帝人株式会社 ダイバーシティ推進室長 日高 乃里子 氏



### 第2回

平成29年9月1日

『機関や地域を超えた女性研究者の活躍推進』

東京農工大学 副学長・女性未来育成機構長 宮浦 千里 氏



### 第3回

平成30年3月16日

『無意識のバイアス-Unconscious Bias-とダイバーシティ推進』

日本大学 上席研究員 大坪 久子 氏



### 第4回

平成30年6月18日

『ダイバーシティ・サポート・オフィスの事例から学ぶ  
-他機関との連携によるダイバーシティ推進と発展-』

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 総務本部ダイバーシティ推進室長 井出 ゆかり 氏



### 第5回

平成31年3月7日

『仕事と介護の両立ができる職場づくりを考える』

社会保険労務士法人 グラス 代表・特定社会保険労務士 新田 香織 氏



### 第6回

令和元年9月26日

『ダイバーシティ推進担当者のためのLGBTQサポートの原則』

NPO法人 共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援  
全国ネットワーク 代表理事 原 ミナ汰 氏



### 第7回

令和2年6月26-30日 セミナー動画の配信※

東邦大学<子育て支援セミナー>

『小学生の放課後の今～小1の壁をのりこえろ～』

放課後NPOアフタースクール代表理事・新渡戸文化学園 理事長 平岩 国泰 氏

東邦大学<介護セミナー>

『あなたの親は大丈夫? ~ゴミ屋敷セルフネグレクトのサインとは~』

東邦大学 看護学部 教授 岸 恵美子

『健康長寿を延ばす食事~加齢による筋肉量の減少を“食べる”ことで防ぐ~』

東邦大学 医療センター大森病院 栄養部室長 古田 雅



### 第8回

令和2年8月21日 収録※ (pp.12-15 参照)

『研究機関におけるダイバーシティ推進の連携をどのように発展させていくか』

千葉大学 ダイバーシティ推進部門長 森 恵美

東邦大学 ダイバーシティ推進センター長 片桐 由起子

量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室長 柿沼 志津子



### 第9回

令和2年10月16日 オンライン開催※

『多様な人材が活躍できる環境づくりを考える』

東京都立大学 ダイバーシティ推進室 特任研究員 藤山 新 氏

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のためオンラインにて開催



### コンソーシアム連絡会参加者の声

無意識のバイアスについて、各大学での実践例、好事例紹介は非常に役立ちました。  
《第3回参加者》

LBGTQの支援について、何を取り組めばよいかわからないような状態だったので、他機関のお話がとても参考になりました。《第6回参加者》

各研究機関同士が交流をもち、情報を共有することでお互いを高め合っている様子が伝わってきて、大変心強く感じました。《第8回参加者》

具体的な事例をもとに、ダイバーシティを進める上で何が重要等についてのお話やお考えを伺うことができ大変勉強になりました。  
《第9回参加者》

### 参加機関 (15 機関)

- 国立大学法人 千葉大学
- 東邦大学
- 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構
- 日本大学 生産工学部
- 国立大学法人 東京農工大学
- 公益財団法人 かずさDNA研究所
- 東京理科大学 ダイバーシティ推進室
- 国立研究開発法人 国立がん研究センター
- 千葉県立保健医療大学
- 電気通信大学
- 筑波大学 ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター
- 東京都市大学 ダイバーシティ推進室
- 国立大学法人 鳥取大学
- 千葉市男女共同参画センター
- 国立大学法人 香川大学 (参加受付順)

# ライフイベント支援

## ニーズ調査の実施

本事業では、国立大学・私立大学・国立研究機関という組織の違う3機関の研究者が、ライフイベント上の課題（妊娠、育児、介護等）と研究活動を両立する上で、どのようなニーズをもっているのかを明らかにするため、平成28年5月～平成29年1月にかけて調査を実施しました。

調査を企画するにあたり、現在育児中や介護中の研究者に加え、今後育児や介護に関わる可能性がある方、これまで育児や介護を経験した方から見たニーズも把握することで、研究者にとって、育児や介護と仕事の両立のためには何が必要なのかについて明らかにすることを目指しました。3機関で協議を重ね、丁寧に調査計画を立案し、3機関共通の質問項目を設け、各機関の特徴を確認できる工夫を取り入れました。

調査の結果、3機関798名の研究者から回答を得ることができ、子育てのみならず介護と仕事と両立の不安の声も多く寄せられました。こうした意見を反映し、育児だけでなく、介護と仕事の両立が必要な研究者への支援策も重要であると考え、各機関で独自のライフイベント支援を実施しました。これらの結果は、『研究職における子育て・介護ニーズ調査 調査報告書』として冊子化し、全国の大学や研究機関へ配布しました。



## 各機関での取り組み

### 千葉大学

#### ◆ 学内保育園の共同利用

平成29年4月より、東邦大学や量子科学技術研究開発機構（以下、量研）の研究者が、千葉大学西千葉キャンパスにある学内保育園を共同利用できる「特定保育枠」を設定し、1日2名まで未就学児の受入ができる制度を新設しました。

#### ◆ 介護に役立つセミナーの開催

ニーズ調査の結果を踏まえ、介護に役立つセミナーとして、千葉市あんしんケアセンターより、認知症サポーター養成講座講師をお招きし、認知症の基礎的な知識や症状、認知症の方への対応方法等について紹介するセミナーを実施しました。

【開催日】 平成30年 11月 21日  
令和元年 11月 19日



### 東邦大学

ニーズ調査の結果をもとに、育児・介護について学ぶ場として各種セミナーを企画・運営しました。子育てセミナーは、働く親の心配事に視点をおき、就学前の子どもを対象として「子どものけがや不慮の事故」「子どもの食事」「子どもと一緒に体験」をテーマにセミナーや体験の場を企画しました。また、小学校入学以降は、学童クラブを取り上げ「小1の壁」を乗り越える工夫を学ぶ機会、小学校低学年・高学年から中学・高校生に分けその時々の教育にどのように向き合うかについて学ぶセミナーをオンラインで実施しました。

介護のセミナーは、高齢者の理解からスタートし、日常生活で起こるさまざまな出来事を取り上げ、セミナーや映画上映で学ぶ機会を提供しました。セミナーに関しては、録画しておいたものをオンラインセミナーとして、本学のみならず千葉大学や量研、そしてコンソーシアム参加機関も視聴可能な機会を設けました。

### 東邦大学と量子科学技術研究開発機構の連携

東邦大学は平成31年3月に、子育てと介護の情報が1冊にまとめられた『育児・介護サポートのしおり』を発行しました。学内外で利用できる各種制度や相談窓口、お役立ちサイトも掲載し、学内関係者からも好評を得ました。出来上がった冊子は量研の関係者からも評価を得て、さらに自身の機関版を作成してほしいと希望があり、掲載される内容に関しては東邦大学の専門家が監修するなど連携・協力し、令和2年9月に量研版が発行されました。



### 量子科学技術研究開発機構

事業開始時点では、規程に定められている育児・介護休業の他に支援策がなく、どのような支援が可能かを考えることから始める必要がありました。そこで、連携事業を活用して、千葉大学及び東邦大学が実施している支援策やその導入方策を参考に、まず不妊治療のための特別休暇制度に着手しました。その後、休日出勤時のイベント保育、育児割引券の導入、ベビーシッター会社との提携と利用時の料金補助、企業主導型保育施設との協定締結等、職員のニーズに応える形で、機構内の制度を順次整えました。

これらの制度を策定する際には、3機関で行ったニーズ調査と、平成30年度に機構で行ったダイバーシティ意識調査により収集したニーズに合致した施策になるよう留意しました。また、これら調査は何か仕事との両立に障害となるのか、どのような支援制度がライフイベント中の職員から望まれているかを知るよい機会になりました。また、介護については「これから近い未来に来るもの」「いつ終わるのが見えないのが不安」と漠然とした不安を抱える職員が多く、千葉大学で行った「認知症サポーター養成講座」を実施した他、東邦大学の協力・監修を得て、『育児・介護サポートのしおり』を作成し、全職員へ配付を行いました。



# 研究支援要員配置制度

## 研究支援要員の配置

研究者のライフイベントによる研究活動の中断防止を目的として、妊娠や出産、育児や介護により研究時間の確保が困難な研究者を対象に、研究活動リスタート支援、育児・介護支援として、研究支援要員配置を行いました。

本制度は、3機関で利用を希望する研究者を募集し、審査を行った上で利用者を決定する形で支援を行いました。研究支援を担当する補助要員は、実験補助、調査研究補助等を担当しました。産後復帰を支援する「研究活動リスタート支援」は、6年間で合計32件（千葉大学24件、東邦大学3件、量子科学技術研究開発機構5件）、育児・介護負担のある研究者を支援する「育児・介護支援」は、6年間で合計168件（千葉大学117件、東邦大学14件、量子科学技術研究開発機構37件）の支援を行いました。

○ **研究活動リスタート支援** 妊娠や産後復帰等による研究活動の中断を防止するために、研究支援を担当する補助要員を配置。対象者は各機関の研究者（性別不問）。

○ **育児・介護支援** 育児や介護による研究活動の中断を防止するために、研究支援を担当する補助要員を配置。対象者は各機関の研究者（性別不問）。

平成27～令和2年度※  
支援件数

	研究活動リスタート支援	育児・介護支援
千葉大学	24	117
東邦大学	3	14
量子科学技術研究開発機構	5	37
合計	32	168

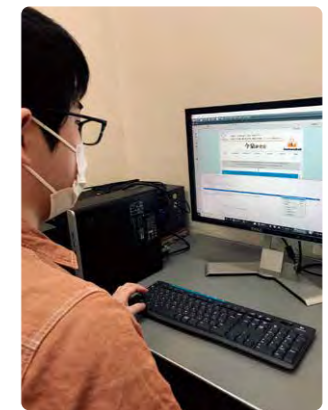
※令和2年12月時点の支援実績数

## 研究支援要員配置制度 利用者の声

利用者	今泉 祥子 いまいずみ しょうこ
所属	千葉大学大学院 工学研究院
職位	准教授
研究領域	情報工学、画像処理 メディアセキュリティ

私は現在2歳になる子どもを育てており、平成31～令和2年度に本制度を利用させていただきました。以前とは生活が大きく変化し、平日夕方には帰宅するため、勤務できる時間が限られています。また、発熱等による保育園からの急な呼び出しが多く、早退や休暇を取らなければならないこともあり、時間確保の難しさを感じていました。

そのような中、本制度により研究室内の大学院生らを研究支援要員として雇用することができました。彼らは、おもに4年生の実験補助や論文執筆のアドバイス、ホームページや研究室紹介資料の作成など研究室広報にかかる仕事に従事しています。本制度の利用により、令和2年度には3本の学術論文を発表することができました。また、科研費・研究活動スタート支援や学内の研究費支援プログラムにも採択されており、時間に制約がある中でも、順調に研究を行うことができています。今後も民間等を含めた研究助成への申請を積極的に行い、継続的な成果を出していきたいと思っています。



研究支援要員の勤務風景

また、家庭では、子どもとの時間を大切に、できるだけ一緒に過ごしています。平日は夜寝るまでの短い時間ですが、積み木やブロック、本を読んで過ごし、休日は散歩や買い物に出かけ、母親としての日常を送っています。なかなか特別なことはしてあげられませんが、何気ない時間を愛おしく思う日々です。



## 研究支援要員配置制度 利用者の声

利用者	松本 紋子 まつもと あやこ
所属	東邦大学 理学部 生物学科
職位	准教授
研究領域	医化学

平成25年に東邦大学着任以来、東邦大学ダイバーシティ推進センターに支えられてきました。着任時には、私の二人の娘は小学3年と保育園年少でした。私は平成26年度から平成29年度に、東邦大学大学院理学研究科が日本代表校として採択された神経科学領域のダブルディグリープログラムの担当教員に任命されました。修士課程の2年間で日本とヨーロッパの提携大学でそれぞれ修士号が取得できるプログラムで、1年間で学位授与相当の指導を要求され、大学院生が夜遅くまで研究したいという気持ちに応えるのと、子育てとの両立に苦労しました。

特に平成28年度は、18時までに小学1年の娘の学童保育のお迎えに行き、小学6年の娘の塾がある月金は大学の私の居室で宿題をさせ、21時すぎに一緒に塾へ迎えに行き、親子3人で帰宅するような生活でした。小学6年の娘の中学受験直前の追い込みの時期は、入試委員としても入試業務に多くの時間を費やし、卒業論文や学位論文の仕上げで忙しい研究室の学生と娘の両方のサポートに多忙な毎日でした。

研究支援要員配置制度のおかげで、平成27年度には一期生の学生を大学院生としてヨーロッパへ送り出し、オランダマーストリヒト大学の留学生が修士(理学)を授与され、平成28年度から平成29年度はフランスリール大学の留学生に加え、毎年3名の一期生、二期生に修士(理学)が授与されました。平成29年度に准教授になり、その年度末にはダブルディグリープログラムへの貢献が認められ東邦大学教育賞を受賞しました。蛇足ですが、当時小学6年の娘は第一志望校に合格し、現在高校1年になりました。

本制度は学生にも影響があると感ずます。東邦大学に着任して間もなく、他の研究室の女子大学院生から、研究を続けながら新しい家庭を築きたいとの相談を受けました。その後、彼女は他大学の博士課程に進学しましたが、今でも交流があり、平成29年3月の東邦大学男女共同参画推進センター主催セミナー「リケジョ、研究者への道」では、私だけでなく、博士課程進学後に結婚・出産し、子育てと博士課程の研究に奮闘中の彼女にも講演していただきました。私自身、研究支援要員だけでなく研究室の学生全員にも支えてもらい、共存共栄していると感じています。私の研究室の学生たちにとっても、これからの時代の生き方や働き方を考えるよいきっかけになるのではないかと感ずます。



## 研究支援要員配置制度 利用者の声

利用者	謝琳 しやりん
所属	放射線医学総合研究所 先進核医学基盤研究部 標識技術・プローブ開発グループ
職位	主任研究員
研究領域	放射性薬理学

研究支援要員配置制度に初めて申し込んだのは、任期付職員のテュニアトラック2年目の時で、ちょうど第2子妊娠中でした。まだ上の子ども小さく体力的にも大変な時で、その一方で期間内に研究成果を出すため、実験動物の飼育も実験を止めることもできず困っていました。そんな時にこの制度で研究支援要員を配置していただきました。

半減期が比較的長い核種を使った薬剤開発の研究をしていて、1回の実験が長いのですが、支援要員の方のサポートで保育園のお迎えや子どもの病気で休まなくてはいけない日があっても、実験を中断せずに続けることができ、実験計画通りに研究を進めることができました。その安心感から気持ちに余裕が生まれました。何よりも、同時に支援していただいたダイバーシティ推進連携研究助成金を使用しての研究成果が出て、任期付職員から定年制職員へとキャリアアップをすることができました。



来てくださる方も勉強熱心でやる気のある方たちで、学生さんたちと一緒に研究をすることで活発な意見交換ができたり、一緒に季節のイベント行事をしたりと研究グループに明るい雰囲気がもたらされました。

学生さんたちにも本制度での支援業務で得た経験がご自身の研究に、また後の研究活動や将来の仕事に役立ててもらえれば、と考えています。

この研究支援要員配置制度は引き続き利用したいと考えていますし、他のライフイベント中の研究者の方にもぜひ利用をお勧めしたい制度です。



明るくて優秀な学生さんが研究支援要員として来てくださることは、とても助かっています。ただその学生さんの卒業した後に同じような方を見つけることがとても難しいです。連携大学、大学院から研究支援要員の方をご紹介いただける制度があれば、もっとありがたいです。



# 研究力向上

若手研究者が上位職昇任に必要なとされる能力を育成するため、以下の支援を行いました。

- **研究スキルアップセミナー** 英語力向上や共同研究推進のための機会を提供
- **研究インターンシップ** 新たな研究領域を開拓する力を育む機会を提供
- **英文校閲経費支援制度** 研究成果を広く公表するために、英語論文の校閲経費を支援
- **外国人招へい支援制度** 海外の研究者を招へいする研究会等の主催に必要な経費を支援
- **共同研究強化支援制度** 女性研究者が共同研究を行う経費を支援し、マネジメント力を育成

## 研究スキルアップセミナー

研究力スキルアップに役立つものづくりや英語プレゼンテーション、心を動かす伝え方、産学協同研究促進等をテーマに3機関で連携してセミナーを企画・開催することで、多くの研究者が参加し、研究力の向上や、研究者のネットワーク拡大につながりました。



平成28年9月28日  
会議英語 (Conference English) スキルアップセミナー



平成30年7月27日  
共同研究推進のためのセミナー

## 研究インターンシップ

量子科学技術研究開発機構 (以下、量研) は「研究力向上」のプログラムとして「放射線医学総合研究所 (以下、放医研) インターンシップ」と「短期インターンシップ」を実施しました。

「放医研インターンシップ」では量研千葉地区の各研究部から受け入れ可能なテーマを募り、テーマからご自身の研究に関連するものについて千葉大学、東邦大学の学生、研究者が新しい技術を知るための場として、またご自身の研究や研究室への導入を目指して実習を行いました。特に人気があったのは生物標本作成、病理解析プログラムで、論文のための実験データに使う臓器を実際に標本にし、染色、病理解析ができるまで週に1~3回、長期間通われる方もいらっしゃいました。

「短期インターンシップ」は量研の関西光科学研究所、高崎量子応用研究所にある装置や実験機器を実際に扱う様子を見て講義を受け、サンプルの作成・測定等の実習を行いました。ふだんの研究室とはまったく異なる環境での2泊3日の実習ということで、講義・実習ごとに質問が絶えることなく、終了予定時間を超過したりすることもあり、参加者の熱意を感じました。



関西光科学研究所でのインターンシップの様子



高崎量子応用研究所でのインターンシップの様子

### インターンシップから共同研究へ

インターンシップで紹介された量研の保有する実験機器や研究プロトコルをご自身の研究に取り入れたい、と共同研究へと発展させる研究者もいらっしゃいました。インターンシップを契機としたこの協力関係が、研究の深化に伴い、より一層強固なものとなることに期待しています。





## 英文校閲経費支援制度

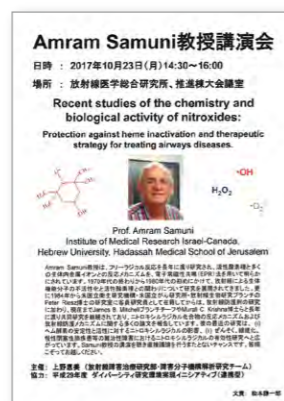
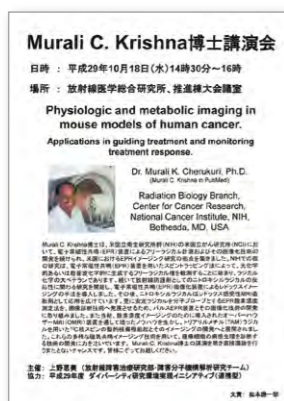
若手女性研究者の研究活動の促進とスキルアップを目的として、学術雑誌への投稿論文の英文校閲を行う経費の支援を行いました。平成27年度から平成29年度までは補助金により実施し、平成30年度以降は、各機関の独自経費で継続して制度を実施しています。

6年間で合計105件（千葉大学 46件、東邦大学 35件、量子科学技術研究開発機構 24件）の支援を行いました。

## 外国人招へい支援制度

女性研究者の国際的な研究交流の促進と、女性研究者の研究スキルアップを目的として、女性研究者が主となって外国人研究者を招へいし、セミナー等を開催する場合に必要な経費の一部を助成する制度を実施しました。各機関で平成27年度から平成29年度の3年間補助金により実施し、平成30年度以降は、東邦大学及び量子科学技術研究開発機構では、各機関の自主経費で継続して支援を行っています。

6年間で合計26件（千葉大学 11件、東邦大学 10件、量子科学技術研究開発機構 5件）の支援を行いました。



平成27～令和2年度※  
支援件数

	英文校閲経費支援	外国人招へい支援制度
千葉大学	46	11
東邦大学	35	10
量子科学技術研究開発機構	24	5
合計	105	26

※令和2年12月時点の支援実績数

## 共同研究強化支援制度

女性研究者による共同研究の促進を目的として、各機関に所属する女性研究者が主となって、他機関の研究者と共同で実施する独創的・先駆的な研究に対して、研究費の助成を行いました。

6年間で合計53件（千葉大学 13件、東邦大学 19件、量子科学技術研究開発機構 21件）の支援を行い、新たな共同研究が誕生し、研究者ネットワークが広がりました。

### 《冊子『女性研究者 研究活動紹介』の発行》

平成29年12月に、3機関の女性研究者の研究活動を紹介する冊子を発行しました。本冊子では、各機関で共同研究強化支援制度を利用して取り組んだ共同研究の成果と、75名の女性研究者の研究を紹介しています。



### 《合同研究発表会の開催》

3機関の研究者と企業・研究機関との共同研究のマッチングをする機会として、6年間で7回、合同研究発表会を実施しました。合同研究発表会では、研究分野を限定せず、さまざまな分野の研究者が集まり、研究発表を行うことで、異分野の研究者の出会いの場となりました。





共同研究強化支援制度 利用者の声 千葉大学

利用者	溝上 陽子 みぞかみ ようこ	共同研究者	山田 真希子 やまだ まきこ
所属	千葉大学大学院 工学研究院	所属	放射線医学総合研究所 脳機能イメージング研究部 脳とこころの研究グループ
職位	教授	職位	グループリーダー
研究領域	視覚情報処理、色彩工学	研究領域	認知神経科学、認知科学

支援を受けて取り組んだ研究テーマ

「視環境情報が彩度知覚の適応メカニズムに与える影響」

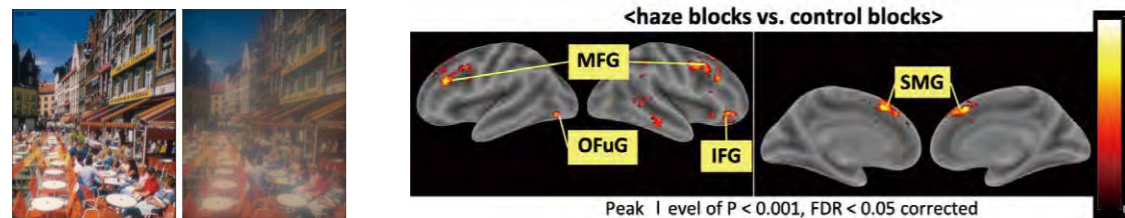
大気霧・もや、眼の加齢により水晶体が濁ることで、視界の彩度が落ちることがあります。だからといって、年をとると視界がだんだん色褪せて見えることはありません。これは、私たちには視環境の彩度の低下や変動を補正して見るメカニズムがあるためと考えられます。本研究では、環境の彩度変化への視覚的適応メカニズムについて、人に視覚刺激を見せて応答してもらう「心理物理学的手法」と、fMRIで脳活動を計測する「脳科学的手法」を用いて検討しました。実験では、画像をフォギーフィルターを通して観察し、かすみによる光学的な彩度低下に対する適応効果を調べました。その結果、瞬間的な補正効果が認められました。脳活動に関しては、かすみの有無による明確な差は得られませんでした。かすみの補正能力の個人差が大きいことが明らかになりました。それを考慮した解析を行うと、前頭葉・側頭葉・後頭葉の複数の領域がかすみの処理に関連していることが示唆されました。研究成果は、国内・国際学会で発表し、今後の論文も計画しています。

共同研究のメリットや効果

私は心理物理学的に視覚や色の見え方について研究していたため、実際にその見えがどのような脳活動と関係するのかはわかりませんでした。山田さんとの共同研究により、研究の幅が大きく広がりました。また、これまで知らなかったことを教えていただいたり、ディスカッションで刺激を受けたりするうちに、思考の幅も広がってさまざまな新しいアイデアも出てきました。異分野の研究者とコラボレーションすることで起こる化学反応のようなもの、楽しさを経験できたことが、私にとって大きな収穫でした。

その後の発展

彩度知覚の研究以外に、顔の色と表情知覚の共同研究も計画しています。現在は心理物理実験を進めている段階です。「見え方」の特徴が明確になった後、脳活動を測定できればと考えています。今後も、さまざまな研究をご一緒できればうれしいです。



画像の例：フォギーフィルター無し(左)と有り(右)

かすみ補正能力の個人差との相関が高かった脳領域

共同研究強化支援制度 利用者の声 東邦大学

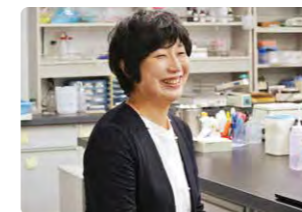
利用者	大寺 恵子 おおでら けいこ	共同研究者	尚 奕 しゃんいー
所属	東邦大学 薬学部 生化学教室	所属	放射線医学総合研究所 放射線影響研究部
職位	助教	職位	主任研究員
研究領域	医歯薬学、基礎老化学、生化学	研究領域	放射線がん、がん予防研究
		共同研究者	小久保 年章 こくぼ としあき
		所属	放射線医学総合研究所 生物研究推進室
		職位	室長
		研究領域	実験病理学、実験動物学

支援を受けて取り組んだ研究テーマ

私が放射線医学総合研究所(放医研)の尚奕先生と共同研究強化支援を受けて取り組んだテーマは「食餌制限の有益作用とそのメカニズムに関する研究」です。私たちの研究には、「ストレス」と「食餌制限」という2つの共通のキーワードがありました。しかし、研究のアプローチは互いに違っており、私はタンパク質から、尚奕先生は遺伝子からでした。互いにもっている実験技術が異なることが、共同研究を始めるきっかけとなりました。翌々年には、新たに病理組織学的な所見を研究に取り入れるために、インターンシップ制度でご指導いただいた小久保年章先生にも加わっていただきました。

共同研究のメリットや効果

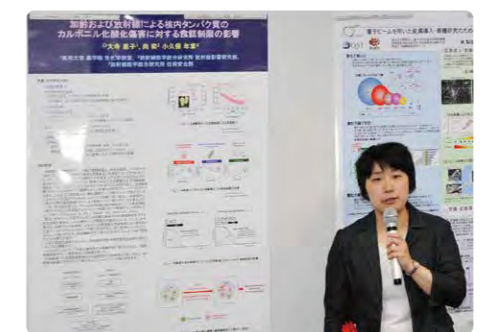
私が共同研究のメリットと感じたのは、井の中の蛙であった自分がそこから少し脱却できたことです。私は、東邦大学薬学部を卒業し、修士課程、博士課程と進み、修了後はそのまま助教として採用されました。このことは大変幸運でしたが、その一方で、私は外の世界を知る機会を失っていたようです。放医研の尚奕先生や他の研究者と研究について話したり、さまざまな施設・設備に触れたりするなかで、大学では感じられない研究所という別の組織の雰囲気を感じることができました。また、本事業の研究発表会では、薬学以外の医学、看護学、理学、工学などのさまざまな分野で活躍されて



いる研究者の方々と接することができました。自分の発表に対して予想もできないハツとするような質問を受けたり、自分とはまったく異なる研究を目の当たりにしたり、とても新鮮であるとともに、大変貴重な経験をすることができました。これらの体験は、私の研究に対する考え方を大きく変えるものでした。

その後の発展

共同研究の成果としては、Book Chapterを共同執筆しました。共同研究強化支援制度の支援期間は終了していますが、共同研究の内容に関しても研究の成果を原著論文としてまとめ、その後も研究を通して良好な関係を保ち続けていきたいと思っています。



共同研究強化支援制度 利用者の声 量子科学技術研究開発機構

利用者	中島 菜花子 なかじま なかこ	共同研究者	浦 聖恵 うらきよえ
所属	放射線医学総合研究所 重粒子線治療研究部 放射線がん生物学研究グループ	所属	千葉大学 理学部
職位	研究員	職位	教授
研究領域	放射線医学	研究領域	分子生物学

支援を受けて取り組んだ研究テーマ

私たちは重粒子線治療の質を高めるための基礎研究をしています。重粒子線は腫瘍細胞(がん)のDNAを切断することで、がんを治療します。DNAが切断された細胞の中で起こる一連の反応: DNA損傷応答は、細胞死を引き起こす一方、切断箇所を修復します。DNA修復は治療効果の低下・がんの再発につながり、修復されたDNA鎖に間違いがあると、2次発がんの原因になります。この反応の違いは、DNA損傷応答の中で、どの因子が活性化するかによって選択されています。私たちは重粒子線によって起こるDNA損傷応答の分子メカニズムを解明することで、照射条件の最適化を目指しています。将来的には、DNA損傷応答の人為的制御によって、難治性がんの治療効果を高めたり、組織別・個別の治療条件の最適化に応用できると期待しています。

共同研究のメリットや効果

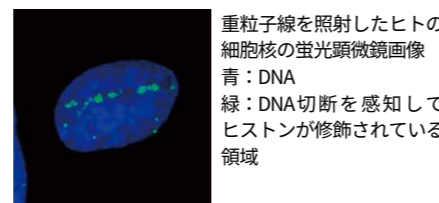
研究の中で、「ヒストン修飾酵素」が、重粒子線照射後のDNA損傷応答に重要な働きをしていることがわかってきました。このヒストン修飾酵素研究の先駆者である千葉大学理学部の浦聖恵教授と共同研究を行い、「重粒子線照射後のDNA修復で働くヒストン修飾酵素」「重粒子線照射後に高まる遺伝子発現に働くヒストン修飾酵素とその活性化メカニズム」を明らかにし、論文に発表しました。

私たちの研究は、臨床に役立つ研究成果が求められますが、ダイバーシティ助成のおかげで生物の基礎研究であるエピゲノム分野を取り入れた独創的な研究課題にチャレンジでき、大きなステップを踏み出すことができ、大変感謝しております。千葉大学の研究者の方には、今回の共同研究で重粒子線照射実験を始め放射線照射実験に触れていただきました。放射線照射実験は設備が必要ですのでハードルが高いかと思われそうですが、今回のような共同研究をきっかけに、今後エピゲノム分野の先生方にもっと放射線・重粒子線研究に興味をもっていただけたら幸いです。千葉大学の大学院生の皆さんを始め、若い研究者との共同研究は、パワフルな熱意や研究意欲により刺激を受けました。

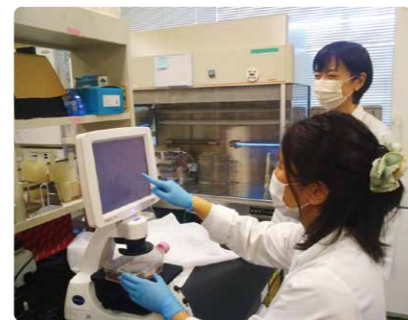
その後の発展

この共同研究は共同研究強化支援での助成後に、この研究をもとにした新たな研究課題で科学研究費助成事業等の外部資金を獲得し、さらに研究を継続しています。そして、次に浦教授らが発見した「ヒストン修飾酵素がDNA損傷応答の中で働くメカニズムの研究」で、再びダイバーシティ推進連携研究助成金にて支援され、この研究の結果報告から次の外部資金を獲得でき、もうすぐ業績を発表するところです。

生命現象を取り扱う研究には予想通りにいかないことが多く、長い時間と労力がかかり、私的な面からも継続が困難になることがあります。私自身はそのような時に、ダイバーシティの支援制度に助けられましたし、今後は若手研究者(研究意欲・熱意、発想力があれば若手です!)が、困難を乗り越え、研究に集中できる環境を整えていけるよう、このような支援を続けていただければありがたいです。



重粒子線を照射したヒトの細胞核の蛍光顕微鏡画像  
青: DNA  
緑: DNA切断を感知してヒストンが修飾されている領域



実施担当者の声



事業開始当初から、毎月1回、3機関の実施責任者、実務担当者に参加して、運営会議を行ってきました。事業を進めていく中で、時間の制約から、毎月の会議に参加することが難しい場面もありました。そこで平成28年度からは、ビデオ通話システムを活用し、オンラインで会議に参加できる体制を整備し、対面とオンラインを併用しながら会議を実施してきました。こうした実績があったことで、新型コロナウイルスの感染拡大により、対面で集まることが困難になった際も、全員がオンラインで打ち合わせに参加できる体制にスムーズに移行することができました。いつでもオンラインを活用できる体制ができたことで、会議だけでなくイベントの開催も行う等、気軽に対面で集まる機会が増え、相談しやすい関係が築けたと感じています。

千葉大学 ダイバーシティ推進部門 小玉 小百合

本事業に実施担当者として関わることができ、国立大学・私立大学・国立研究機関が連携することの楽しさ、難しさを経験しました。一つひとつともに考え、悩み、開催していく経験が、次第に紙の上の計画から実績に変わり、それぞれの組織の中に支援策として定着してきたことが、手応えとしてわかるようになりました。点として存在していたもの同士が手をつなぐ、それぞれの顔がわかり、頼れる存在になった今、振り向いてみると3つの道が重なり、強く大きな道になってきたと思います。このような大きな事業に参加できたことは、本学の研究者に大きな還元があったと同時に運営する我々の大きな成長につながりました。

東邦大学 ダイバーシティ推進センター 小向 里永子

この事業に携わって5年、右も左もわからないところから始めて、支援制度を一つつくるだけでもあちこちいろいろな部署に相談して回り、千葉大学、東邦大学という先輩機関についていくのでいっぱいだったことを思い出します。

少し余裕が出てきて、コンソーシアム連絡会で知り合った他機関のダイバーシティ推進に携わる方々がどのように制度をつくったかなどをお伺いしたり、その先で紹介されたいろいろな方にお話をお伺いしたり、とひたすら伝手をたどって、よりよい制度策定やセミナー運営を教えていただくなど、学び続けた5年でした。中には「自分たちも発足当時にいろいろなところからご指導いただいたから」とノウハウを惜しげもなく開示してくださる機関もあるなど、「連携」に助けられ、その大切さを実感しました。

今年度末でこの事業は終了しますが、この6年間で知り合った方々、機関との連携はこの先も継続して相互に発展していけたら、と考えています。

量子科学技術研究開発機構 ダイバーシティ推進室 江川 恵里加



# キャリア・アップ支援

## 東邦大学

### 千葉大学

#### 《女性教員昇任システム》

優秀な女性研究者の上位職へのキャリアパスを保証する仕組みとして、年俸制にかかる業績評価基準等を活用し、助教、講師、准教授でその評価が最上位者について昇任人事を検討し、学長が決定する「女性教員昇任システム」を導入。本システムにより、平成28年度から令和元年度までの4年間で、9名の女性教員が昇任しました。

##### 昇任者数実績

職位別	H28	H29	H30	R1	計
教授へ昇任			1	2	3
准教授へ昇任	1	1	2		4
講師へ昇任	1	1			2
計	2	2	3	2	9

所属別	計
医学系	3
理学系	2
薬学系	2
看護学系	1
社会科学系	1
計	9

#### 《部局への表彰制度の実施》

仕事と家庭生活の両立支援に関する組織的活動を推進するために、平成21年度より3年に1度、ワーク・ライフ・バランス支援活動認証・表彰制度を実施しています。本制度は、千葉大学の各部局やセンターに設置されている両立支援室を中心に申請を受け付け、特にすぐれた活動を行っている部局に対して表彰を行うものです。

平成29年度に第3回目を実施し、東邦大学、量子科学技術研究開発機構からも審査委員を迎え審査を行った結果、医学部附属病院、看護学研究科が表彰部局に決定しました。医学部附属病院は、短時間制度や病児保育・学童保育の充実等、育児支援のための環境整備を積極的に進めている点、看護学研究科は、女性研究者の在籍比率が高いことから、女性が能力を発揮できる環境を充実させつつ、男性研究者比率も上昇させている点がダイバーシティ推進の観点から、高く評価されました。



第3回表彰式の様子  
 【写真左から】看護学研究科 両立支援室長代理 諏訪 さゆり  
 学長 徳久 剛史  
 医学部附属病院 両立支援室長 生坂 政臣  
 理事 山田 賢

本学が担当するキャリア・アップ支援は、管理職を対象にしたインタビュー、キャリアアップにつながる上位職登用セミナー、そして上位職に向かう女性研究者の裾野拡大に取り組みました。

上位職インタビューでは、本学理事長、学長、学部長、病院長等にご自身の経験、ダイバーシティに対する思いや期待することを伺い、冊子やHPを通じ学内外へ発信しました。このインタビューは、ふだんは知ることのできない経験や思いが共有でき、次の活動につながる提案をいただく機会になりました。

上位職登用セミナーや裾野拡大につながるセミナーは、次世代育成からスキルアップまでさまざまな角度からテーマを設定し、バラエティに富んだセミナーを開催できました。中でも研究者の裾野拡大と新たな研究の視野を広げる「ものづくりセミナー」は好評を得て、放射線医学総合研究所（現量研）での出張セミナーも開催できました。それぞれの企画には、3機関やコンソーシアム参加機関からも参加をいただき、よい交流の場にもなりました。



炭山理事長との対談の様子



上位職インタビューをまとめた冊子

## 量子科学技術研究開発機構

当機構では、連携機関の東邦大学に研究者、技術者や病院に勤める看護師の方々向けのセミナーを依頼し、「こうなったらいいな」のアイデアがすでに発明であるなど、実際の臨床現場での出来事を発明につなげるセミナーを開催しました。「発明＝実物をつくり上げること」と考えていた受講者から、まさかふだんの職場での仕事の中にあるほんのちょっとした思い付きだけでもよいとは！と驚きの声が上がると、わかりやすい説明が好評を博し、「これを変えたらよくなる」を発明にしたいと、次回開催の『実践編』も続けて受講する方が多く見受けられました。

女性上位職セミナーではよくある「キャリアプランを立てて…」といった堅苦しいものではなく、講師の中野先生のお人柄もあり、子育てをしながら働く、という自分事として理解しやすい話から入り、セミナー開始から講師の話に引き込まれ、特に「お子さんを保育園に預ける時、お子さんが泣くことに罪悪感をもたなくていい」という言葉に、経験をもつ方から安堵の声が上がっていました。会場全体にあたたかい気持ちがあふれるセミナーとなり、アンケートの結果も好評でした。



セミナー告知ポスター



# 各機関の取り組み

## 千葉大学

平成18年度に両立支援企画室を設置し、研究者の育児・介護と研究の両立支援や女性研究者支援を中心に取り組んできました。令和2年度には、ダイバーシティ推進部門に組織名を変更し、すべての人々のダイバーシティ（多様性）を尊重するため、誰もが個性や能力を發揮し、活躍できる環境の実現を目指した取り組みを進めています。

### ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）事業の情報発信

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）の取り組みについて、Webサイトやリーフレットを作成し、学内関係者や他機関に情報発信を行いました。



WEB サイト

リーフレット

### ダイバーシティ推進部門の取り組み

#### 《ダイバーシティ推進部門の運営》

運営会議を設置し、本学教職員のワーク・ライフ・バランスの支援、女性研究者の研究活動の支援等の企画立案、その他ダイバーシティ推進に関する重要事項の審議等を行い、事業を推進しています。

#### 《ベビーシッター利用料補助制度》

**育児支援** 本学で勤務する教職員が、就労のためにお子さまを保育できない場合に、ベビーシッターによる在宅保育を利用した場合の利用料を一部補助する割引券（内閣府主催企業主導型ベビーシッター利用者支援事業：ベビーシッター派遣事業割引券）を交付しています。

**病後児保育支援** お子さまの病気やけがの回復期に、お子さまの在宅保育にベビーシッターを4時間以上利用した場合に、大学が利用料を一部補助する制度を実施しています。

#### 《病児ケア勉強会》

平成21年度より、毎年1回、小児科の医師を講師に招き、子どもの病気とその対処法に関する最新トピックを学ぶ勉強会を開催しています。育児中の教職員だけでなく、子どもと関わる仕事に就くことを希望している学生も多数参加しています。



#### 《ダイバーシティ推進のためのセミナー開催》

令和元年9月26日、千葉大学西千葉キャンパスにて、原ミナ汰氏（NPO 法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事）を講師に迎え、『性の多様性に気づくー互いを尊重し合うための基本知識と対応ー』を開催しました。本セミナーは、千葉市男女共同参画センターとの共催により実施しました。



#### 《ダイバーシティ推進のための環境整備》



**女性専用休憩室 & 資料ライブラリー** 妊娠中の方や体調のすぐれない方、乳幼児を連れて授乳等にも利用できる個室を設置。ベビーカーや車椅子での利用もしやすいよう段差のない間口の広い部屋になっています。また、本学教職員を対象に、ダイバーシティ等に関する書籍や過去のセミナー動画のDVDの貸出を行っています。

#### 《会議 & 相談スペース》

少人数での打ち合わせや、オンライン会議にも利用できるようインターネット回線を完備したスペースを設けています。ガラス扉で区切られているため、プライバシーを保ちながら利用できる空間になっています。常駐するキャリアコーディネーターへのキャリア相談にも応じています。



#### 《情報発信》

ダイバーシティ推進部門のWebサイトでは、各種制度やイベント情報を掲載し、随時更新しています。さらに、支援制度の啓発ポスターを学内に掲示することで、制度を広く周知し、利用しやすい環境づくりを進めています。



Web サイトでの情報発信(左)・啓発ポスター(中央・右)



## 東邦大学

本学が本事業の採択期間中にさまざまなライフイベント支援、キャリア支援、上位職へのインタビューや裾野拡大を実施してきました。これらの取り組みを紹介するとともに、期間中の発展的な活動について紹介します。

### ライフイベント支援の取り組み

#### 《子育て支援対象範囲の拡大》

働く親が安心して子育てができるように、乳幼児期・就学前・就学後にテーマを分けてセミナーを開催してきました。下記にあげるセミナーは、学内外の参加者から大変好評でした。そして、子どもの事故・けがをテーマにしたセミナーは、開催後に『子ども救急お助けブック』を作成し、広く配布しました。

また、女性研究者の在職比率が増加し、上位職も増えてきたことで、子育ての課題は、乳幼児期だけでなく就学後から思春期まで幅広くなっています。ニーズ調査の結果でも、子どもの就学後と仕事の両立の困難性については、乳幼児期に比べると低くはなっているものの、女性が困難性を訴える割合が多く見られました。そこで、就学後の問題を多角的に捉え、オンラインセミナーを以下のように企画しました。

就学時：「小学生の放課後の今」～小1の壁をのりこえろ～  
就学後：「働く親のシンパイごと」小学校低学年編、  
小学校高学年編、中学生編、高校生編



クリアファイル

『子ども救急お助けブック』

#### 《子育て・介護の理解を深め学ぶ機会の提供》

子育て・介護の理解を深め学ぶ機会は、セミナーや講演会だけでなく映画上映も活用しました。いのちが生まれ、終わることを3家族のドキュメンタリーを通して知る映画『うまれる ずっと、いっしょ。』、子どもの食事を考える『いただきます』、人生の向き合い方を考える『人生フルーツ』、親の老いを見届ける『ぼけますから、よろしくお願ひします。』を上映。上映した映画のいくつかは、社会的に話題のテーマも含まれ、タイムリーに情報提供できる機会となりました。



映画上映会 ちらし



### 上位職インタビューの効果



本事業中に、本学の執行部の先生方に男女共同参画、女性研究者支援、ダイバーシティをテーマにしたインタビューにご協力いただきました。インタビューの内容は、先生方のご経験を知る機会になっただけでなく、今後の活動のダイバーシティ推進センターの活動方針について示唆に富むものでありました。その内容は、次世代育成から介護に至るまで幅広く、また学内の関連部署との連携を推進するものとなりました。具体的には、法人人事部と連携した活動があげられます。次世代育成や女性活躍に関する行動計画を具体的な活動にするために、定期的に話し合いの場をもち、次年度にもつながるイベントを企画しています。

また、インタビューはダイバーシティ推進センターの活動を執行部の先生方により深く理解していただく機会となり、学外の広報誌などに本学のダイバーシティ活動を発信していただく等につながりました。



「上位職インタビュー」掲載誌面

### さまざまな研究支援セミナーの開催

学内の研究支援関係部署と連携することで、本学で開催される研究支援セミナーを千葉大学や量子科学技術研究開発機構（以下、量研）、そして一部はコンソーシアム参加機関の方にも参加していただける機会をつくることができました。特に、本学は臨床研究に携わる教職員が多いため、臨床研究に焦点をあてたセミナーを開催することができました。このセミナーは、研究の基礎編であるベーシックセミナー、指導者や次期指導者層へ向けたステップアップセミナーなど、対象を分けて開催しています。その結果、多くの参加者から評価をいただき、終了後のアンケートには次の企画につながるニーズが多く寄せられています。



セミナー ちらし

### 社会への発信

本事業で千葉大学や量研と連携することで、これまでの取り組みの幅が広がり、学内だけの発信ではなく広く社会に発信することの重要性を理解することができました。

そこで、私たちの取り組みを社会に役立てていただくための発信として、女性活躍支援を表彰するさまざまな制度へ応募することを挑戦しました。その結果、令和元年度は千葉県男女共同参画事業者表彰で教育機関としては初めての千葉県知事賞を受賞し、令和2年度は東京都女性活躍推進大賞の教育部門で大賞を受賞しました。今後もこのような機会に社会への発信ができるよう、さらに取り組みを進めていく予定です。



千葉県知事賞



## 量子科学技術研究開発機構

量子科学技術研究開発機構（以下、量研）は平成27年度にこの事業に採択されてから、主に研究者のライフイベントと研究の両立を支援するいくつかの支援制度を策定し、運営しながらのダイバーシティ推進となりました。この6年間の取り組みを紹介します。

### 育児支援

量研の研究所の一般公開日や土日祝日等の保育園休園日に、ベビーシッターさんを派遣していただく形でのイベント保育を開催。後にこのベビーシッター会社と業務提携を結ぶことで、量研職員は利用料金のみで利用可能になり、利用料金について半額をダイバーシティ推進室がサポート

できるように制度を整えました。

また量研でも機構内保育施設の設置を検討したものの、実現が非常に難しいことから、代替制度として近隣にある企業主導型保育施設2つと協定を結び、職員が優先的に利用できるようにしました。



### 介護支援

平成30年度に職員へアンケートを取った結果、近い将来直面するであろう介護に対して漠然とした不安をもっているという回答が多かったことを受けて、前年度に千葉大学が実施した「認知症サポーター養成講座」を量研千葉地区、高崎地区の2か所で開催しました。

講座ではそれぞれの地域包括支援センターの先生のお話や寸劇、配られた資料を熱心に学ぶ職員の姿が印象的でした。講座後のアンケートで「もっと利用できる制度を知りたい」という声があったことと、東邦大学が作成していた「育児・介護サポートのしおり」の量研版作成の許可をいただけたので、令和2年度に量研版を作成し、全職員に配布しました。



### 両立支援



育児・介護で研究時間の確保が難しい研究者に、研究支援要員を配置する制度をつくり、動物飼育や実験を止めることなく継続できるようにしました。

また、この支援制度の思いがけない効果として、支援要員となった学生さん等が研究現場に入ることで、現場での意見交換が活発になる部署が見受けられました。

## ワークライフバランスの推進

職員の仕事と生活の調和、健康で充実した生活を目指し、ワークライフバランスの大切さを周知するとともに、ダイバーシティ推進室で次世代育成支援対策推進法、女性活躍推進法の一般事業主行動計画を策定し、目標をポスターにして全地区で掲示を行いました。特に次世代法に関しては「くるみん」認定取得を目指して、男性職員の育休取得を積極的に促し、また、職員一人ひとりが自分の時間を大切にできるように各地区の定時退勤推奨ポスターも作成しました。



周知ポスター

### 理事長のイクボス宣言



産前・産後休暇や育児休業を取得しやすい職場環境の実現に向けて、理事長が「イクボス宣言」をし、内外に発信しました。これにより「ちばイクボス同盟」の参加事業者にもなりました。

これらのダイバーシティ活動を経営陣が積極的に支援していることを外部へも発信していることが評価され、事業最終年度に千葉県男女共働参画事業表彰式で千葉県知事賞を受賞しました。

### ダイバーシティ推進室の活動紹介

量研でのダイバーシティの取り組み、支援制度の周知のために『Harmony-QST ダイバーシティ通信』を創刊、全職員へ配布しました。理事長からのメッセージとして、「ダイバーシティ（多様性）の推進は量研の発展になくてはならない取り組み」と機構全体の取り組みであることを積極的に発信するとともに、実際に支援制度を利用した職員の声を掲載しました。また、外部への情報発信として機構外部HPにダイバーシティ推進室のページを作成しました。

量研としては、この事業に参加し、他機関の活動状況や良好事例の導入のため、DSO（ダイバーシティ・サポート・オフィス）へ加入、全国ネットワークダイバーシティ 関東・甲信越ブロックへ参画するなど、さまざまな大学、研究機関から運営方法を学んだ結果、ライフイベントと研究の両立支援がなんとか形になるところまできた6年間でした。これからも発展し続けられるよう他機関と連携しながら取り組みを進めます。



QST ダイバーシティ通信の発行



# 活動の記録

## 平成 27 年度

ダイバーシティ環境促進 ■ 研究力向上 ■ キャリア・アップ支援

### 2015 年

7月13日 平成 27 年度科学技術人材育成費補助事業  
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」採択決定

11月11日 ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム設立 調印式

11月11日 ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアムキックオフシンポジウム  
(場所：千葉大学)

### 2016 年

2月13日 合同セミナー・上位職登用セミナー  
『東邦大学の男女共同参画のあゆみと次のステージに向けて』(場所：東邦大学)

2月13日 研究力向上ものづくりセミナー基礎編  
『臨床発のものづくりとは何か?』『ものづくりを支える資金の獲得方法』  
(場所：東邦大学)

3月1日 公益財団法人かずさDNA研究所 見学会

3月11日 共同研究推進のための合同研究発表会 (場所：千葉大学)

3月15日 株式会社花王 見学会

## 平成 28 年度

5月20日～8月31日 育児・介護アンケート調査 (千葉大学・東邦大学・量子科学技術研究開発機構)

6月27日 共同研究発表会 (場所：千葉大学)

8月23日 研究力向上ものづくりセミナー DVD 上映会 (場所：東邦大学)

9月28日 会議英語 (Conference English) スキルアップセミナー (場所：千葉大学)

10月11日 13日 次世代育成支援セミナー『研究のこころえ』(場所：東邦大学)

11月25日 千葉エリア産学官連携オープンフォーラム 2016 出展 (場所：千葉大学)

12月3日 ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム 共同シンポジウム  
(場所：東邦大学)

## 2017 年

1月19日 株式会社帝人との意見交換会

2月8日 短期インターンシップ  
～10日 (場所：量子科学技術研究開発機構・関西光科学研究所)

2月15日 女性研究者の裾野拡大『ものづくりセミナー』(場所：東邦大学)

2月20日 ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム取り組み発表 (場所：日本大学)

2月22日 上位職登用セミナー『研究育成のための次世代育成の意味』(場所：東邦大学)

3月1日 上位職登用セミナー『研究育成のための次世代育成の意味』(場所：東邦大学)

3月3日 研究スキルアップセミナー  
『東京大学医科学研究所におけるがん臨床シークエンス研究』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)

3月7日 次世代育成支援『リケジョ研究者へのセミナー』(場所：東邦大学)

3月16日 17日 伝わる英語プレゼンテーションセミナー (場所：千葉大学)

3月23日 女性研究者の裾野拡大『ものづくりセミナー』(場所：東邦大学)

3月27日 共同研究推進のための合同研究発表会 (場所：千葉大学)

3月28日 スキルアップセミナー『臨床発 発想のものづくり』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)

## 平成 29 年度

4月25日 女性研究者の裾野拡大『ものづくりセミナー』(場所：東邦大学)

6月16日 共同研究推進のための合同研究発表会 (場所：千葉大学)

6月16日 第1回 コンソーシアム連絡会

8月29日 スキルアップセミナー『ものづくりセミナー実践編 臨床現場とものづくり』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)

8月29日 女性上位職登用ミニレクチャー『ともに考える、人と人とのつながり』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)

9月1日 第2回 コンソーシアム連絡会

9月22日 25日 伝わる英語プレゼンテーションセミナー (場所：千葉大学)



10月25日 研究スキルアップセミナー『臨床スタッフに向けた大学病院の新たな取り組み』  
26日 (場所：東邦大学)



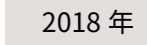
11月29日 研究スキルアップセミナー  
『臨床スタッフに向けた大学病院の新たな取り組み』(場所：東邦大学)



12月2日 子育て支援セミナー『子どもの事故・けが 不慮の事故から予知した対応へ』  
(場所：東邦大学)



12月20日 共同研究推進のための合同研究発表会 (場所：量子科学技術研究開発機構)



2018年

1月24日 短期インターンシップ  
～26日 (場所：量子科学技術研究開発機構・高崎量子応用研究所)



2月22日 研究スキルアップセミナー『伝える・伝わる！プレゼンテーション』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)



3月15日 介護支援セミナー『高齢者の理解 介護の実際』(場所：東邦大学)



3月16日 第3回 コンソーシアム連絡会



3月20日 介護支援セミナー『転ばぬ先 靴選びは慎重に“転倒防止の靴選び”』  
(場所：東邦大学)



3月28日 共同実施機関による協定書の更新

平成30年度



6月18日 第4回 コンソーシアム連絡会



7月27日 共同研究のためのセミナー・合同研究発表会(場所：量子科学技術研究開発機構)



8月19日 子育て支援セミナー『子どもと一緒に体験できる！ がらくたで宇宙船をつくろう』  
(場所：東邦大学)



9月22日 介護支援セミナー『セルフネグレクトのサインとは？』(場所：東邦大学)



10月20日 介護支援セミナー『健康長寿を延ばす食事』(場所：東邦大学)



10月23日 研究者の裾野拡大『研究マインドを育む～さまよえる探求心から戦略的探求へ～』  
(場所：東邦大学)



11月18日 子育て支援セミナー『子どもの食事の現状と家族ができること』(場所：東邦大学)



11月22日 研究者の裾野拡大『研究マインドを育む～さまよえる探求心から戦略的探求へ～』  
(場所：東邦大学)



12月21日 共同研究促進のためのセミナー・合同研究発表会 (場所：東邦大学)

2019年



2月15日 研究スキルアップセミナー『心を動かす伝え方』  
(場所：量子科学技術研究開発機構)



3月7日 第5回 コンソーシアム連絡会



3月7日 JST マッチングプランナーによる産学協同研究促進セミナー&相談会  
(場所：千葉大学)

令和元年度



4月18日 JST マッチングプランナーによる産学協同研究促進セミナー&相談会  
(場所：量子科学技術研究開発機構)



9月14日 28日 研究支援セミナー『臨床研究ステップアップセミナー』(場所：東邦大学)



9月26日 第6回 コンソーシアム連絡会



10月2日 18日 認知症サポーター養成講座 (場所：量子科学技術研究開発機構)



10月20日 介護支援セミナー『親の老いを見とどける』(場所：東邦大学)

2020年



2月12日 短期インターンシップ  
～14日 (場所：量子科学技術研究開発機構・高崎量子応用研究所)

令和2年度



4月～6月 子育て支援セミナー『小学生の放課後の今』(Web 配信：東邦大学)



6月26日 30日 第7回 コンソーシアム連絡会



8月21日 第8回 コンソーシアム連絡会



10月16日 第9回 コンソーシアム連絡会



11月18日 短期インターンシップ ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止  
～20日 (場所：量子科学技術研究開発機構・関西光科学研究所)

2021年



3月19日 ダイバーシティ CHIBA 研究環境促進コンソーシアム成果報告シンポジウム  
(場所：千葉大学)



平成27-令和2年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業  
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）

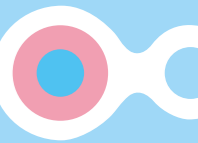
千葉大学・東邦大学・量子科学技術研究開発機構

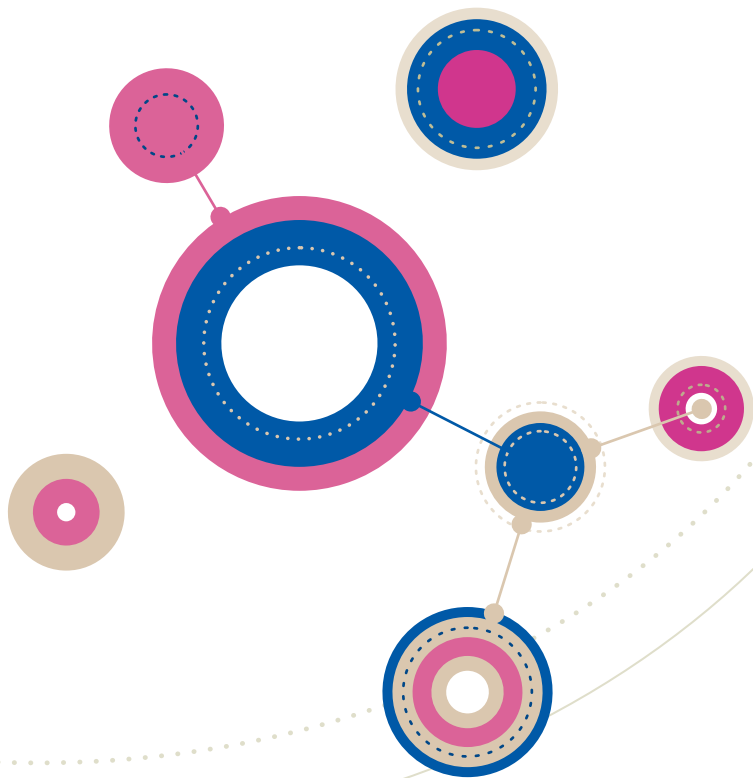
## 事業成果報告書



令和3年3月1日 発行

発行者 | 千葉大学 運営基盤機構 ダイバーシティ推進部門  
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33  
TEL / FAX 043-290-2020  
E-mail diversity-office@chiba-u.jp





CHIBA  
UNIVERSITY

千葉大学



東邦大学



量子科学技術研究開発機構